

《研究ノート》

鶴見俊輔における理論と実践の乖離

多元的な鶴見像の再記述に向けて

寺田 征也

第一章 「どうして自分の解釈理論を実践できなかったか」

第一節 鶴見俊輔の解釈理論

谷川嘉浩（2020）は「鶴見俊輔は、どうして自分の解釈理論を実践できなかったか」という論考のなかで、多元的自己に基づく多元的な解釈を論じ、また「決め打ちの態度」でもって他者を批判することへの忌避感を語っていたはずの鶴見が、姉和子や小田実にまさに「決め内的態度」で批判していたことを指摘する。

自他の個人史の突き合わせとして他者を読もうとするあまり、批判を向ける際の鶴見は、他者の汲みつくせなさを見落とし、「同情」を働かせることにしばしば失敗した。共感的に評価を向ける際には、その個人史を高く見るあまり、誰かの言動を過剰な装飾で物語化した。これはエピソードの圧縮という方法自体がもたらした歪みだった。（谷川 2020: 24）

谷川は、鶴見俊輔の読み書きに関する論理に着目してきている。鶴見は「読むこと」よりも「書くこと」を重視していたが、それは「読むこと」の困難さへの自覚にある。また、「書かれたものを厳密に読むこと」に対する反アカデ

ミズム的な鶴見の傾向と重ね合わさることによって、「いかに他者の書いたものを読むべきか？」「眼前の文章を自身はいかなる態度で読めばよいのか？」という観点が持ち込まれる。その結果、谷川によれば、晩年の鶴見における『解釈』とは、自己の多元性を念頭に置きながら、自身の関心を見極めつつ、（同じく多元的である）他者の記号表現に向き合うこと」とみなされることとなる（谷川 2020: 19、（）は原典）。すなわち、一つのものに汲み尽くせない自己が、一つのものに組み尽くせない他者の記述したものと出会い、向き合うことで、一義的な解釈が回避されるとする解釈理論に至り着く。谷川が見出した鶴見の解釈理論とは、多元的自己と多元的他者とが、書かれたものを媒介して、多元的な解釈、多元的な人物像が創出されること企図したものであると言える¹。

しかし、鶴見は自身の打ち立てた解釈理論を実践し損なっていた。谷川によれば、他者の個人史を鶴見自身の経験に則して解釈するという「自他の個人史を短絡させるという仕方」を用いていた（谷川 2020: 23）。そしてそうした短絡が、自他の個人史を紋切型で何度も語るという、鶴見自身の示した解釈理論に反する事態を生み出していたと指摘する。

1 プラグマティズムや多元主義の考え方から自己の分裂、多元性に鶴見が関心を払っていたことは、宮城哲（2014）においても指摘されている。

自他の個人史や自己形成に関わるエピソードを好み、それを膨大に記憶し、繰り返し語った。講演や対談、エッセイや普通の会話などで、自己形成に関する挿話を繰り返し語ることで、彼はそれらを洗練された物語へと研ぎ澄ませた。物語の洗練が、そのストーリーに乗らない要素を見落とす働きを伴う以上、それは類型化への道でもある。個人史やエピソードを好むという鶴見の思想的スタイルが、ジェイムズの解釈理論を変容させる要因だったのだ。伝記・評伝や、個人史をベースとする彼の思考スタイル自体が、他者を類型化し、解釈を固定化する危険を含んでいた。(谷川 2020: 23-24)

自己と他者、テキストの多様な解釈を理論として論じた鶴見が、他者を典型的に語る姿は、確かに矛盾している。谷川の議論は、こうした鶴見の自己矛盾を鋭くついている。

第二節 生き方の方針としての「自己教育」

「鶴見は矛盾を持つことを否定せず、むしろ肯定的に捉えていたのであり、自己矛盾があること自体が鶴見の論理の範囲内ではないか？」とする見方もあるだろう。しかし、その視点は鶴見の教育論にまた反するものである。

鶴見俊輔は、その教育論において、外部から問いと答えを与えられる教育ではなく、絶えず状況から問いと答えを見出し、自分のうちに反射として残るものを探求することの意義を「自己教育」という言葉で論じた。もうろくまでを射程に入れた「自己教育」という考え方は、鶴見自身の生き方の一つの方針としてあったのだ

ろう²。絶えず状況に応じた思想を作り、その思想を反射という「実践」の領域に落とし込んで遂行する。無論、思想と「実践」とは絶えず乖離するであろう。だからこそ、絶えざる「自己教育」によって、自らの思想と「実践」を修正し続けねばならない。このことは、鶴見が生きていく上での一つの規則であっただろう。そしてその規則を全うしようとしていた。

その意味で、鶴見は自分の立てた思想や見出した規則に則して生きようとしていたと、見てとることができる。

第二章 対象への「同伴」

谷川からの問題提起を、別の議論から見ている。取り上げるのは、吉本隆明との対談である。

鶴見は吉本隆明との対談の冒頭で次のように述べている。

安保闘争で、全学連が国会構内へ突入して集会を開いた、六月十五日の事件に対する吉本さんの「思想的弁護論」(徳間書店『自立の思想的拠点』収録)をとともおもしろく読んだのですが、このなかにはわたしの共感できる部分と共感できない部分がふくまれています。まず、わたしが共感をもって理解した部分を自分の言葉で要約してみるのもので、それを吉本さんの意見とわたしの意見との共通項として確認しておき、その上で、意見の分かれるところをとり出して問題にしてみたいと思います。(鶴見・吉本 [1967]1996: 138、傍点は引用者)

「わたしの共感できる部分と共感できない部

2 鶴見俊輔の教育論については寺田征也(2014a)を参照されたい。

分」という表現は、鶴見自身が過去に示したコミュニケーションの理論に依拠してなされたものであろう。

鶴見はそのディスコミュニケーション論の中で、コミュニケーションには、相互のやり取りの中で理解された「コミュニケーション」の部分と理解されずに残った部分である「ディスコミュニケーション」の二側面を含むと論じていた。その上で、「ディスコミュニケーション」に着目し、理解ができなかった部分、互いの間での「共感できない部分」の分析と改善を目指していた³。

吉本との対談における発言は、こうした鶴見のディスコミュニケーション論を踏まえてなされたものである。すなわち、吉本との対談で見えてくるのは、鶴見が自らのディスコミュニケーション論を実践しようとしている姿である。

さて、この吉本との対談は、しばしば先行する鶴見論においても言及されているものである。その点で、鶴見を論じる上で比較的重要な対談の記録である。この対談は、安保闘争に対する両者の立場の違いから、「国家」「思想」「大衆」といった用語をめぐる議論が展開されている。

吉本は、「国家権力を棄揚する思想」の確立を第一義的な問題として設定し（鶴見・吉本 [1967]1996: 148）、諸国家間との関係、ウルトラな存在としての大衆、指導者などを包括的に把握し、そのための尺度としての「思想」と、「指導者をも大衆をもチェックできる存在」としての「知識人の原型」を追求することを求める（鶴見・吉本 [1967]1996: 162）。

吉本は、大衆とはウルトラな存在であると捉えている。指導者や国家からの命令のままに命を捨てるような人びとが、吉本の想定する大衆

である。

吉本 ぼくは、大衆のとらえかたが鶴見さんとはものすごく違いますね。ぼくのとらえている大衆というのは、まさにあなたがウルトラとして出されたものですよ。戦争をやれと国家から言われれば、支配者の意図を超えてわっとやるわけです。たとえば軍閥、軍司令部の意図を超えて、南京で大虐殺をやってしまう。こんどは、戦後の労働運動とか、反体制運動では、やれやれと言われるとわっとやる。裏と表がひっくり返ったって、それはちっとも自己矛盾では無い。大衆というものはそういうものだと思う。（鶴見・吉本 [1967]1996: 159）

他方で鶴見は、「ウルトラの心情をあまり好かない」と断った上で、「ウルトラとは別の大衆が存在するという想定を」していると述べる（鶴見・吉本 [1967]1996: 161）。鶴見にとっての大衆は、例えば戦場でぶつぶつ文句を言っているような老兵、全身ではなく「半身の姿勢で戦争に協力していたような人たち」という（鶴見・吉本 [1967]1996: 159）。

鶴見はそもそも、吉本のように対象を包括的に把握しようとする思想は無いと想定し、「人間の究極の問題として、自分がまちがっているという可能性は、科学的に考えて排除することはできないというのが、基本的な考えかた」と述べる（鶴見・吉本 [1967]1996: 157）。また、「人間は人間を究極的に裁くことはできない」とも主張する（鶴見・吉本 [1967]1996: 156）。

このような鶴見に対して、吉本は、ベトナム戦争に反対することはベトナム政府に、そして社会主義に同伴することであり、それは自立を欠くのではないかと批判する。鶴見は、そうした批判に対して、「人間は人間を究極的に

3 鶴見俊輔のディスコミュニケーション論については寺田征也（2018）を参照されたい。

裁くことはできない」という立場から、同伴者であることを甘んじて引き受けると述べる。つまり、鶴見は、自分の許容できないものを少しでも持っていたら拒否するのではなく、自分と意見が異なる人びとであっても協働する可能性を閉じないのである。

海老坂武（1986）は、こうした鶴見と吉本のやりとりを「鶴見の判定負け」と裁定している。確かに論争としては、原理原則を把握し、国家などに対する根本的な抵抗を編むべきと主張している吉本のほうがわかりやすく、力強く、そして魅力的である。吉本のほうが語気も強い。

他方で、谷川が描写した解釈理論や、鶴見のディスコミュニケーション論を踏まえれば、鶴見の主張もまた理解できる点もあるだろう。曖昧さを許容してそこから「思想」を編み上げようとする方針や、権威におもねらない人びとに期待をかけることは、鶴見の基本的な態度であった。また、意見が異なるかもしれない他者にも同伴することは、松井隆志（2014、2015）が論じていたような、社会運動の方法論としても有効な姿勢にも連なるものだろう。鶴見の基本的な態度という点では、この対談での主張も一貫した鶴見なりの論理を見て取ることができる。

以上、鶴見と吉本との対談をごく大まかに見てきた。鶴見はウルトラではない大衆の可能性を、この対談において強調した。

他方で、鶴見はそうした主張とは裏腹に、実際にはウルトラな大衆とも言える集団にも「同伴」していた。かれは1960年代頃より、ヤマギシ会の人びととの交流を持つようになり、その擁護者として長い間関わりを持ってきた。世間からは「カルト」として名指しされる集団に関わり続けてきたことは、鶴見における発言と態度の不一致の事例とみなすこともできよう。で

は、鶴見は具体的にどのようにヤマギシ会と関わってきたのだろうか。次節において、詳細に見ていく。

第三章 鶴見俊輔のヤマギシ会への「同伴」

第一節 鶴見俊輔とヤマギシ会

鶴見俊輔が、自身の立てた考えに準じることができなかった出来事として、幸福会ヤマギシ会（以下「ヤマギシ会」）との関わりを取り上げたい。

ヤマギシ会は、1953年に山岸巳代蔵によって「山岸式養鶏会」として始まった。「全人幸福社会」の創造を目指し、無所有一体や無我執着を理念とする農業共同体である。また、そうした理想を実現することを目指した集団農場「実顕地」を複数持ち、実権地への入村を希望する場合には特別講習研鑽会⁴（以下、「特講」）を経ることが求められている。

ヤマギシ会は、そのコミュニケーションとしてのあり方の魅力から多くの知識人によって評価されてきた一方で、「カルト集団」としての批判や告

4 特講は「無執着」を重視するヤマギシ会にとって、個我への執着を取り払うための儀式として重視されている。実際に特講に参加した米本和広の記録を読んだ精神科医の斎藤環は、一種の解離性同一性障害を引き起こしていたと語ったという（米本 2007: 238）。

本稿第一章にて、鶴見が自己の多元性を論じていたことに触れたが、鶴見自身の特講体験がその多元的自己論に影響したと考えることは飛躍だろうか。この点については、鶴見がいつから自己の多元性を論じ始めたのか、という視点からの検討が求められる。

発がなされている⁵。そして、ヤマギシ会に関わった知識人のひとりが鶴見俊輔である。

近藤衛（2003）によれば、鶴見がヤマギシ会と接点を持ったのは1959年の山岸会事件⁶が報道された時であったという。鶴見自身の回想でも、『週刊朝日』の記事を読み「おそらく大学出の朝日新聞記者が、国産の思想家山岸巳代蔵をあなどる気分が裏打ちされていて、山岸がそれに向かって歩いている理想を描き得ていないと思われた」と（「決め打ち的態度」!）で述べている（鶴見 [2004]2015: 3）。その後、「声なき声の会」に参加していた際にヤマギシ会若嫁グループと出会い、交流を持つようになった⁷。鶴見は三重県春日山の実験地を訪問し、村人たちと交流をした。その記録は『思想の科学』誌上にて「けっしておこらない人たち ヤマギシカイ訪問記」（1962）として発表された。鶴見はヤマギシ会を訪れた感想として次のように述べている。

一つ、私がヤマギシカイの思想について賛成を保留したいと思う点は、集団の総意を重じて全員で話し合っ、一致点を結論とするという方法、その結論がたえず無固定的に改められてゆくという方法についてである。これでは集団全体がまちがっていたらどうなるか。その集団がまちがっていたらどうなるか。人類全体が、あることについてまちがっていたらどうなるのか。人類全体もまたまちがい得る。その可能性を探し出そうとする努力が、東西の普遍宗教を生み、歴史意識を生み、芸術を生み、無神論や実存主義をも生み出したのだと思う。こうした探求を持続する方向が、ヤマギシカイの思想からは出にくいように思うのだが、どうだろうか。（鶴見 1962: 16）

ヤマギシ会は集団生活を重視する。そのため、決めごとにも集団単位で行う。相互に意見を出し合い、最終的に全会一致で決定を下す。鶴見はヤマギシ会への訪問で、そうした話し合いの現場を目の当たりにし、上記の感想を抱いた。鶴見は、ヤマギシ会は可謬主義的要素を欠いていると見たのだろう。「半身で構える大衆」に寄り添っていきたくて考えていた鶴見にとって、同会はこの時点ではある種の「ウルトラな大衆」に映ったと思われる。初訪問の感想には、そうした鶴見のヤマギシ会に対する微妙な距離感がうかがえる。

しかし鶴見はその後、1963年に特講を受講するなどし、ヤマギシ会との交流を深めていく⁸。『思想の科学』誌ではヤマギシ会に関する記事

5 ヤマギシ会に関する研究としては黒田宣代（2006）がある。批判するものとしては春木進（[1999]2000）、米本和広（[1999]2007、[2003]2021）などがある。また批判的部分を抑制してヤマギシ会の内実を報告しようとしたものとして近藤衛（2003）がある。

6 1958年に三重県に創設された初の共同体〈山岸式百万羽科学工業養鶏株式会社〉の失敗を受けて、会員有志が知人らを第86回特講に参加させ体制の拡充を図ったことに端を発している。特講に参加した家族からの「監禁され講習を受けさせられている」との訴えによって警察が動き、幹部が逮捕や指名手配をされたこともあり、不法監禁事件として報道され、「養鶏団体なのか宗教集団なのか、謎めいた思想集団による怪奇事件」として扱われていた（近藤 2003: 55）。

7 渡辺操によれば、安保反対運動にヤマギシの旗を掲げて参加していたなか、「新聞で鶴見俊輔さんの記事を読み『先生の言う事とヤマギシの考えは同じです』と話に行った」という（渡辺 2014: 3）。

8 山岸会事件の際に山岸巳代蔵が身を隠していた旅館の長男柴地則之が同志社大学の鶴見ゼミにあり、山岸会と大倭教をテーマにした卒業論文に惹かれて特講を受講したという（鶴見 [2004]2015: 3）。

が1962年から1979年にいたるまで17本が断続的に掲載され（思想の科学研究会・検索の会 1999: 332）、またヤマギシ会の会誌『けんさん』にはしばしば鶴見からの寄稿が掲載された。特に、鶴見が特講を受けた際の担当者であった渡辺操は（米本 [1999]2007: 189）、ヤマギシ会会員として数編『思想の科学』誌に寄稿したほか⁹、鶴見の勧めにより『日本残酷物語 現代篇2 不幸な若者たち』（1962）にも記事を書くなど、鶴見が見出した書き手の一人となった。

米本によれば「『ヤマギシは鶴見俊輔さんとおして日本の知識人に影響を強めている。その鶴見さんのお付きが渡辺 [操] だ」と、元村人が話していた」（米本 [1999]2007: 189、[]内引用者補足）。実際に渡辺は、鶴見の没後に組まれた『けんさん』の特集のなかで、鶴見が東京で研究者向けの特講に川喜田二郎、永井道雄、水津彦雄らを紹介し研修を受けさせたこと、同志社大学で担当していたゼミの学生のほぼ全員に特講を勧めていたこと、ベ平連の活動時に脱走した米兵を春日山の実顕地で匿えるよう打診があったことなどを語っている（渡辺 2015: 4）。米本は鶴見を「ヤマギシの広告塔的存在」と述べているが（米本 [1999]2007: 302）、渡辺の回想はそのことを裏付けるものとなっているといえる。

ヤマギシ会は、鶴見を筆頭に、多くの知識人や研究者から評価される一方で、90年代半ばからはネガティブに語られるようになってゆく。1994年には元会員らによる「ヤマギシを考

える全国ネットワーク」が結成されヤマギシ会の内実が批判的に語られるようになる。また1995年には財産返還裁判¹⁰、ヤマギシズム学園の問題などが浮上した（近藤 2003: 307）。95年はオウム真理教による地下鉄サリン事件が起きたこともあり、ヤマギシ会はカルト的なものとして語られるようになっていく。

ヤマギシズム学園は、1985年に「24時間の集団生活を送る私塾」として設立された（近藤 2003: 66）。「心あらば、愛児に樂園を」を掲げていたが、「ヤマギシを考える全国ネットワーク」が94年に同学園内での暴力事件や虐待の実態を語ったことで明るみとなった（近藤 2003: 71）。米本（[1999]2007、[2003]2021）は実際に脱走してきた子どもらへの調査を行い、飢餓や子ども間でのいじめ、大人からの虐待があったとまとめている。

こうした一種の告発がなされる一方で、1997年5月には「やまぎし学園・津小学校、津中学校」の設置計画書を三重県に提出した¹¹（米本 [2003] 2021）。

10 ヤマギシ会は「無所有」を中心的理念としており、実顕地への参画に際してはそれまでの財産をヤマギシ会に無条件委任することが求められるが、元参画者が委任した財産の返還を求めて裁判が起こされた。

11 設置に際して三重県が独自に「元学園生、学園の（元）親、元参画者、他県の小中学校の教師」および学園の児童生徒に対する実態調査を行った（米本 [2003]2021: 216）。その結果は「審議委員に配布するとともに、文部省、児童虐待の所管庁である厚生省、また『ヤマギシの子どもを救う会』から人権申請の申し立てによって調査を行っていた日弁連の担当者に送付」され、「日弁連は九九年五月、ヤマギシ会に人権回復の「勧告書」を出すとともに、知事に対してヤマギシの学校を許可しないように異例の要望書を提出」した（米本 [2003]2021: 219）。結果的に、ヤマギシ会は学園設置申請の結果が出る1999年6月30日の3日前に申請を取り下げることとなった。

9 渡辺本人によると「6回程書いて欲しい」とのことであるが（渡辺 2015: 4）、『思想の科学』の総索引によると計4編（1962、1968、1973、1992）であると確認できる（思想の科学研究会・索引の会 1999: 612）。また夫の渡辺熊雄も2編記事がある。

鶴見はこうしたヤマギシ会への風当たりが強くなるなかでも、寄り添いつづけた。1998年10月には、『『やまぎし学園』からは、これまでにない別のタイプの新しい人が出てくる可能性があり、それは日本国家を超える人であるかもしれない。私はやまぎし学園に期待している』とのコメントをヤマギシ会の会誌に寄せている(鶴見 1998: 7)。ヤマギシ会も、鶴見との友好的関係を保ったようで、鶴見が亡くなった2015年には会誌『けんさん』にて「追悼 ヤマギシ会運動のよき理解者 鶴見俊輔さん(哲学者)」という追悼特集を組んでいる。

第二節 「同伴」がはらむ矛盾

鶴見は当然、ヤマギシ会に対する批判やバッシングがあること、そしてその内容について耳にしていたことだろう。春木進も、この時期の鶴見にはヤマギシ会に対する評価に若干の変化が見られることを指摘する(春木 [1999]2000: 392)。それでも、ヤマギシ会の側に立つ知識人としていつづけたのは、元々ヤマギシ会への関心が1959年のメディアの報じ方から始まったからかもしれない。もしくは、谷川が指摘するように、「決め打ち的態度」でなにかを批判することへの忌避感が働いたのであろう。ヤマギシ会への批判は鶴見自身の同会との関わりのなかで体験されたものと大きく乖離した内容であり、それゆえヤマギシ会という対象の多元的意味を担保し続けようとして、離れることはせず「同伴」し続けようとしたものと考えられる。

この点において、鶴見はヤマギシ会との関わりにおいて、自身の解釈理論を実践していたといえよう。

他方で、鶴見のヤマギシ会への「同伴」は、鶴見が立てた別の原則と鋭く対立することになる。

90年代中盤に取り沙汰されたのは、特に実顕地に住んでいる子どもたちへの劣悪な環境であった。米本によれば、広島弁護士会は広島県三次市の実顕地およびヤマギシ学園にて子どもへの体罰や個室に長時間閉じ込められる「個別研鑽(個別研)」などがなされていたとの事実認定し、それらの中止を警告した(米本 [1999] 2007: 213)。

鶴見は、幼少期から母親に殴られ、抑圧的な教育を受けたことで「不良少年」「悪人」となったと、繰り返し語ってきている。そして、その「不良」性、「悪人」性こそが自身の抵抗を論じる起点となっているとしばしば述べている。鶴見の自己規定として、殴られ、暴力を受ける側というものが、その被虐への抵抗こそが、鶴見の思想の原点の一つであったと言っ

てよい。そうであるならば、鶴見はヤマギシ会に対するもう一つの態度として、被虐されたとされる子どもたちの側に立ち、会を批判する立場に回る、という選択肢もあったはずである。いやむしろ、そうすべきだったのではないだろうか。しかし、そのような道は開かれることはなかった。

母親からの抑圧が自分の思想を育て、戦争に対してはその思想から抵抗をすべきであったとの自己語りを繰り返した鶴見だったからこそ、抑圧される側に立つべきであっただろう。これは倫理的な問題ではなく、鶴見が繰り返し語った「態度」「反射」の問題である。鶴見は「不良」としての語りを実践し得なかった。

こうしたヤマギシ会をめぐる出来事と鶴見の「同伴」は、ある側面においては鶴見自身の立てた思想に従っているが、他の側面ではまた自身の立てた別の思想や行動原理に反している。ヤマギシ会との関わりは、鶴見の諸思想・理論間での齟齬を照らし出すものであり、鶴見が自

身の原理を貫徹できなかったという問題をはらむものとなっている¹²。

第四章 むすびにかえて

第一節 転向研究の方法の延長から描き出す鶴見俊輔像

原田達（2001）は鶴見俊輔が大衆のポジティブな部分のみに焦点を当て、ネガティブな側面は看過してきたと指摘している。ヤマギシ会に対する鶴見の態度は、無所有一体のユートピアを実現しようとするある種のウルトラな大衆への「同伴」の実践という側面を持ち合わせていた。そのことは、大衆のポジティブな部分の強調という路線とも重なるものであり、その点では鶴見は一貫している。

他方で、ヤマギシ会への批判や告発を、少なくとも表面上は直視することはせず、外部からの対象に対する「決め打ちの態度」による批判を拒む実践の結果とみなすことができよう。しかしそのことは、ヤマギシ会や親から抑圧されていたとされる子どもたちの側に立ち、「不良少年」なりの抵抗を実践するに至らなかったことを意味する。このことは、「悪人」として自己規定し、暴力や権力への抵抗を強く主張した自身の態度と大きな矛盾を生むこととなっている。鶴見は「不良少年」「悪人」としての態度を、少なくともヤマギシ会との関わりにおいては示せなかった。

12 春木進も次のように指摘する。「ヤマギシ会は資本主義国にあって、資本主義を否定する生き方をいちおう実現したコミュニオンである。革新的な思想家である鶴見氏は、そのことへの評価をどうしても捨てきれないように見える。ヤマギシ会を否定するとなると、人生の晩年で自己批判をすることにもなる。それを避けたいのではないだろうか」（春木 [1999]2000: 391）。

谷川はなぜ「どうして自分の解釈理論を実践できなかったか」との問いを掲げたのか、その理由には言及せずに、鶴見における理論と実践が乖離していく様を描出している。それゆえ、「理論と実践が一致しているべき」もしくは「理論と実践は一致しなくてもよい」という、ありうるいずれの立場も採用していないように見える。そして、この両者の立場を採用していたのが、まさに鶴見だったのではないだろうか。

鶴見は「思想」は「信念」と「態度」によって構成されると論じた¹³。端的に言えば、「考えていること」と「行動すること」とによって「思想」は構成されるとする議論である。そして鶴見の歩みは、この「思想」の定義に沿っているようにも、反しているようにも、いずれの側面を含みつつ複雑に進められているものと思われる。すなわち、多元的自己という視点に立てば、諸思想や諸理論、諸「信念」と諸「態度」もまた一人の人間の中に混在しても構わない、という筋道を描くことも可能となる。

鶴見に対して、理論と実践との間の矛盾、「信念」と「態度」の間の齟齬を指摘したとしても、おそらくは次のように返答するであろう。「『信念』と『態度』は決して一致することはない、そう枠づけた上で、わたしはその人がどのような『態度』を取るのか、そこに注目していきたいんだな」、といった風に。

このように考えていくと、結局のところ、鶴見においては「自身の立てた原則や理論を実践したい」という流れと、「自身の立てた原理や理論が実践できなくてもいい」という流れとが、並立している。そしてこの両者の使い分けないし並行が、鶴見の思想・理論と実践の特徴である。それゆえ自己矛盾を鶴見に指摘したと

13 鶴見の思想の定義については寺田征也（2014b）を参照されたい。

しても、「確かにその指摘は正しいんだ」と許容されて終わってしまうだろう¹⁴。

そうであるならば、鶴見における矛盾を指摘するよりも、かれの実践や「態度」の論理を丹念に調べ、描出していくほうが研究としてより実りあるものとなるだろう。谷川の事は、その実践例の一つと言える。

鶴見における理論と実践がどのように一致しまた乖離し、その論理や過程はいかなるものであるのか。この問いは、これからの鶴見俊輔研究の一つの方針となるだろう。そしてまた、この方針は、鶴見俊輔の評伝を再記述することに結びつくだろう。

第二節 転向研究の方法論と評伝の再記述

鶴見は転向研究の方法として、戦時中の知識人たちに関する新聞記事の記述を通じて、そこからあらわれる「記述の理論」を取り出す試みをしたと語っている（鶴見・菅 1979: 116）。鶴見俊輔のあゆみや思想、理論もまた、「記述の理論」の描出という方法によって記述する筋道があるのではないだろうか。それは、鶴見のポジティブな側面もネガティブな側面も含めて、記録を丹念にたどりながら鶴見俊輔の評伝を再記述する試みへと向かう可能性を持っている。

黒川創『鶴見俊輔伝』（2018）は、膨大な資料や証言を踏まえて編み上げられたものであり、鶴見俊輔の評伝としては決定的な著作であるといってよい。他方で、取り上げられなかったことがらが残されているのも事実である。例えば、本稿で扱った鶴見とヤマギシ会との関わりも、記述されていない事実のひとつである。前述の通り、鶴見は1960年前後から、ヤマギシ会や渡辺操ら会員と交流を続けてきた。黒川の

著作においてはこのことは触れられていないが、書かれてない実践の論理を丹念に記述し、鶴見俊輔の生涯の多様な側面を積み重ねていくことが、かれの思想と実践の意義をより多元的に立体的に把握する助けとなることだろう。

もしくは、桂秀実（2006、2016）による批判なども¹⁵、ネガティブな部分を含めた鶴見俊輔の総体を描きだすうえでは、取り入れるべきである。上野俊哉も指摘している通り、鶴見は神秘的な体験に関心を持ち、「微温的な人道主義者、ヒューマンな活動家知識人」ではなかった（上野 2013: 29）。むしろ、加藤典洋（黒川・加藤 2013）や大河原昌夫（2014）が証言していたような「狂気」の人としての鶴見俊輔像が実態に近いのであろう。そうであればこそ、鶴見の「態度」の負の部分にも着目することが、正当であるといえる。

鶴見は思想の純粹化、体系化を拒否してきた。また、特定の理論の一元化、絶対化を忌避してきた。そうした鶴見であれば、自分自身の思想や哲学が絶対的な「教典」として読まれることを拒むであろう。だからこそ、鶴見俊輔に向かう場合には、鶴見を多元的に読むことが求められよう。その際には、鶴見における矛盾や難点も含めて読まれる必要がある。そのことは、鶴見に関する記述においても同様である。

鶴見俊輔の方法を用いて、彼が語らなかった部分やネガティブな部分にも着目しその論理を記述することが、これからの鶴見俊輔論に一層求められる。

14 鶴見の理論における矛盾を指摘したものとしては、原田（1997）がある。

15 例えば、無党派市民による反戦運動と捉えられがちなベ平連が、実際にはソ連の平和共存路線と親和的であったこと、また、実質的に帝国主義戦争を内乱へと転化しようとするレーニン主義の一端を担うものとなっていたと指摘している（桂 2006: 72-151）。

【参考文献】

- 上野俊哉、2013、『思想の不良たち 1950年代 もう一つの精神史』岩波書店。
- 海老坂武、1986、『雑種文化のアイデンティティ 林達夫、鶴見俊輔を読む』みすず書房。
- 大河原昌夫、2014、『鶴見俊輔に学んだ精神医療』日本評論社。
- 黒川創、2018、『鶴見俊輔伝』新潮社。
- 黒川創・加藤典洋、2013、『考える人・鶴見俊輔』弦書房。
- 黒田宣代、2006、『「ヤマギシ会」と家族—近代化・共同体・現代日本文化—』慧文社。
- 近藤衛、2003、『ヤマギシ会見聞録』行路社。
- 思想の科学研究会・索引の会、1999、『思想の科学 総索引 1946-1996』思想の科学社。
- 下中邦彦（編）、1962、『日本残酷物語 現代篇 2 不幸な若者たち 平凡社版』平凡社。
- 桂秀実、2006、『1968年』筑摩書店。
- 、2016、『タイム・スリップの断崖で』書肆子午線。
- 谷川嘉浩、2020、「どうして鶴見俊輔は自分の解釈理論を実践できなかったか—学びほども、多元的自己、個人史的読解、エピソードという方法」『人間存在論』26、京都大学大学院人間・環境学研究科『人間存在論』刊行会、pp. 13-27。
- 鶴見俊輔、1962、「けっしておこらない人たち ヤマギシカイ訪問記」『思想の科学』（第五次）第3号、思想の科学研究会、pp. 12-16。
- 、1998、「やまぎし学園に期待するもの」『けんさん』第349号、幸福会ヤマギシ会、p. 7。
- 、[2004] 2015、「特別寄稿 ヤマギシ会と私」『けんさん』第553号、幸福会ヤマギシ会、p. 3。
- 鶴見俊輔・菅孝行、1979、「自分史と思想のあいだ」『第三文明』第三文明社、pp. 98-116。
- 鶴見俊輔・吉本隆明、[1967] 1996、「どこに思想の根拠をおくか」『鶴見俊輔座談 思想とは何だろうか』筑摩書房、pp. 137-171。
- 寺田征也、2014a、「鶴見俊輔における『親問題』としての教育」『社会学史研究』日本社会学史学会、三六号、pp. 57-72。
- 、2014b、「鶴見俊輔における大衆文化論の視角としての『思想』」『現代社会研究』東洋大学現代社会総合研究所、11、pp. 105-113。
- 、2018、「鶴見俊輔のディスコミュニケーション論の検討」『明星大学社会学研究紀要』第38号、明星大学人文学部人間社会学科、pp. 29-41。
- 原田達、1997、「鶴見俊輔研究ノート —「ノート No.2」より—」『追手門学院大学人間学部紀要』4号、追手門学院大学人間学部、pp. 89-118。
- 春木進、[1999] 2000、「今でもヤマギシ会を評価されますか？」『カルトの「正体」』宝島社、pp. 380-398。
- 松井隆志、2014、「運動のつくり方の知恵—ベ平連・鶴見俊輔・プラグマティズム」『現代思想』42巻15号、pp. 210-221。
- 、2015、「05 鶴見俊輔—後ろ向きへの前進」『戦後思想の再審判 丸山眞男から柄谷行人まで』（大井赤亥・大園誠・神子島健・和田悠（編））、法律文化社、pp. 86-107。
- 宮城哲、2014、「鶴見俊輔研究序説：『自己』・『サークル』・『古い』の問題群をめぐる」『東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室 研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室、pp. 219-229。
- 米本和広、[1999] 2007、『新装版 洗脳の楽園 ヤマギシ会という悲劇』情報センター出版局。
- 、[2003] 2021『カルトの子 心を盗まれた家族』論創社。
- 渡辺熊雄・渡辺操、1962、「世界中が私のすまい」『思想の科学』（第五次）第3号、思想の科学研究会、pp. 10-11。
- 渡辺操、1968、「一体社会の愛」『思想の科学』（第

五次) 第77号、思想の科学研究会、pp. 50-55。
——、1973、「ヤマギシズム社会と家 世界中
いたる所に我が家あり」『思想の科学』(第六次)
別冊第8号、思想の科学研究会、pp. 48-59。
——、1992、「仲良しの練習」『思想の科学』
(第七次) 第150号、pp. 43-44。
——、2014、「あの人を訪ねて 28 春日山実蹟

地 渡辺操さん」『けんさん』第517号、幸福会
ヤマギシ会、p. 3。
——、2015、「自然に還られた鶴見俊輔先生に
お礼」『けんさん』第533号、幸福会ヤマギシ会、
p. 4。

(てらだ まさや、本学科准教授)